

「タマンゴ」(メリメ)

ナポレオン戦争がフランスの敗北に終り、戦後の歐洲の秩序回復が議せられた一八一四年のウィーン會議に於て、奴隸交易の廢止が決せられるが、現實には多くの奴隸船が交易の利益を求めて大西洋を航行してゐた。フランス人のルドゥ船長の「希望」號もその一つだった。彼は英佛の激突したトラファルガル沖海戦で片腕を失つてゐたが、勇敢かつ有能な船長で、自ら采配を揮つて出来るだけ多くの黒人奴隸を收容し得る船を作つた。實は無理をすれば更に多くを詰込む事も出来たのだが、ルドゥは他船より十人程多く乗せられる程度で満足した。彼の曰く、「黒人だつてとどのつまりは白人と同じ人間ですからね」。

「希望」號はフランスの港を出航してセネガルの海岸に投錨した。名だたる戦士で「奴隸賣りが商賣」の黒人タマンゴが大勢の奴隸を引き連れて海岸にやつて來た。雙方共にウイスキーを啣あふつて怒鳴り合ひながら値段の交渉を行ひ、何とか妥結に至るが、泥酔して凶暴になつたタマ

ンゴは賣れ残つた奴隸に發砲し、止めようとした美貌の愛妻エイシャに激怒して、彼女をルドゥに賣り飛ばして了ふ。二百人近い奴隸を滿載して奴隸船は出航する。

翌朝、素面しよふに戻つたタマンゴは自ら妻を賣り飛ばしたと聞いて仰天し、船を追ひかけ妻を返してくれと懇願するが、武器を奪はれ重傷を負はされた上、自らも奴隸にされて了ふ。船はアメリカ大陸に向ふが、暑さで十二人の黒奴が死ぬ。ルドゥにとつては「何でも無い」數だ。エイシャは彼の妾にされる。が、やがて傷が癒えたタマンゴは「自由を回復するための高潔なる努力を試み」、奴隸達を煽動して叛亂を起し、凄絶な戦闘の末、白人の全乗組員を慘殺する。

處が、黒人達は誰も船の操縦法を知らず、大洋の只中で立往生して了ふ。やがて彼等は酒を飲み過ぎて死んだり、自暴自棄になつて自殺したり、食物を廻つて殺し合ひをしたりして、最後はタマンゴ一人が生き残り、瀕死の状態でイギリス軍艦に救助され、イギリス領植民地の總督府の取り調べを受けて一切を白状するが、さしたる罰は受けなかつた。總督の曰く、「彼の殺したやつは、たかがフランス人ではないか」。タマンゴは總督府で働かされる事になるが、酒浸りになつて病死した。

歌劇「カルメン」の原作者メリメの史實に基く作品である。タマンゴを始め黒人奴隸をかく

も愚かしく描いたのは作者の人種偏見の爲せる業だと説くアメリカの學者があるといふ。愚かしい事を云ふ。萬人は萬人に對して狼だとホップズは云つたが、メリメの描く白人も黒人も共に互ひにとつて狼である。ルドウは「黒人だつてとどのつまりは白人と同じ人間」だと云ふ。無論、本氣で黒人に同情してさう云ふのではない。虐待が過ぎて「人間の積み荷の航海疲れ」が惡化するのを専ら懸念しての、これは頗るシニカルな臺詞のだが、それはともかくこの臺詞は、白人も黒人も「同じ人間」なのだから、共に狼の殘虐な本性を免れぬといふ、作者の暗鬱な人間觀の表明でもある。殘虐な人間性に人種の別などありはしない、彼はさう云ひたいのだ。しかもタマンゴが「殺したやつは、たかがフランス人ではないか」とイギリス人總督は云ふ。國籍の別だつて無いのである。譯者によると、メリメは人間の裡に「驢馬」しか見ぬ「ペシミスト」であつたといふ。タマンゴの「自由を回復するための高潔なる努力」とやらは實に「高潔」ならざる結果を齎すが、「自由・平等・博愛」を掲げたフランス革命も恐怖政治に終つた。人間よ、己が内なる「驢馬」の存在を忘れるな、とメリメは叫びたかつたに相違ない。

（杉捷夫譯、「エトルリヤの壺他五篇」、岩波文庫）